熊本城 復興に向けて

〈21〉天守の石垣復旧

熊本城の天守は大小天守からなっています。大天守と小天守は、築造時期が異なります。文献資料や石垣の築造技術から、大天守は慶長4(1599)年ごろ、小天守は慶長17(1612)年以降に造られたと考えられています。

明治10(1877)年2月19日に熊本城内で火災が発生し、天守は本丸御殿とともに焼失し、石垣の石材もひどく焼けました。また、明治22(1889)年7月28日に発生した「金峰山地震」でも、天守台石垣の内側や出入口の石垣など5か所が崩落し、内側の石垣のほとんどが積み直されていました。

平成28年熊本地震の影響で、大天守内側の石垣は崩落・変形した箇所が多く、外側は崩落した箇所もありますが、大きな変形はありませんでした。しかし、小天守は内側の石垣はほとんどが崩落しただけでなく、外面も崩落・変形が多く確認できました。

平成29年2月より開始した天守閣復旧工事では、まず石垣の測量を行い、崩落状況の記録、石垣の変形を把握し、3月より崩落石材の回収が始まりました。崩落石材の回収が完了すると石垣面が全て確認できるようになり、石垣の変形状況を踏まえて、石垣を積み直すために必要な解体範囲を検討しました。検討にあたっては、石垣の変形状況だけでなく、石垣の修復履歴を調査し、400年以上前の姿を残す貴重な文化財である石垣をできる限り後世に残せるように議論を重ねました。解体範囲が決定すると、石垣の解体が始まります。石垣は再度、同じ位置に積み直すため、拳大程度の間詰め石まで全てに番号をつけて、隣り合う石とどのように接していたか分かるように墨で線をつけてから一つ一つ丁寧に解体します。

今回の石垣復旧で積み直す石材は、大天守で791石、小天守で2,500石程度を数えました。これらの石材一つ一つの調査を行います。調査の目的は、文化財的な記録もありますが、再使用できるかどうか見極めるためでもあります。特に天守の石垣は前述の通り、

▲積み直し後の大天守北面石垣

▲大天守北面石垣の積み直し作業

火災にあっているため、割れているもの、ヒビが入っているものが数多くあります。状態が悪いと積み直した際に弱点となってしまいます。そのため、割れた石材は接着剤で補修して再使用しています。状態によっては接着剤だけでなく、ステンレスピンを打ち込んで補修を行い、約150石を補修しました。また、補修をしても再使用できないほど状態が悪い石材は、新しい石材に交換しました。

石材の再使用検討と同時期に、地震前の石材位置を検証しました。できる限り地震前と同じ状態に戻すための資料を作成します。しかし、地震前の石垣の形状を示すデータはわずかですので、写真などを頼りに検討をしました。

石垣を復旧するための資料がそろい、平成30年7月23日から大天守石垣の積み直しが始まり、11月末には大天守石垣の積み直しが完了しました。年が明けていよいよ、小天守石垣の積み直しが始まります。夏頃には復旧した石垣の姿を眺められるようになりますので、ご期待ください。

(熊本城調査研究センター　嘉村 哲也)